

環境教育の現場から <その5>

キープ協会

キープ協会の環境教育事業

キープ協会では1983年頃から環境教育事業を開始し、現在ではやまねミュージアムや八ヶ岳自然ふれあいセンターの管理運営、キープ自然学校における自然体験プログラムの実施、フォレストーズ・スクールによる指導者育成等を行っている。

「森の入口」として

ふれあいセンターには八ヶ岳の自然や文化について、遊びながら学べるように工夫された展示やプログラムが数多くある。ここではまず、来館者に森に興味を持ってもらうように、文字通り「森の入口」になることをめざしている。こうした「入口」に加えて、さらにステップアップをめざして、宿泊と組合せたさまざまな有料プログラム(やまね学校、森療時間、森を楽しむ週末実習隊など)も用意されている。

企業や学校との連携

このようなさまざまなプログラムのほかに、いわば“オーダーメイド”型として、企業や学校向けにプログラムを組み立てることもある。企業との連携は社員ボランティアや社会貢献あるいは社員研修の一環としても行われ、また学校との連携は、自然体験学習や林間学校として行われている。

このような連携プログラム実施の際に重要な点は、事前打ち合わせを密にして目的を明確にし、それに沿ったプログラムを組み立てることである。さらに、事後プログラムによるフォローによって効果を上げる、あるいは行動につなげることも大切である。『事後学習』として学校へ出前授業に出かける場合もある。

人材育成事業

キープ協会ではこうしたさまざまな環境教育プログラムの実施に加えて、その実施に関わる指導者の育成にも努めている。『指導者』は役者(インタプリター)、脚本家(企画者)、プロデューサー(事業管理者)に大別され、参加型ワークショップ形式で研修が行われる。

さらにこうした指導者養成研修に加えて、将来の指導者を養成するために、インターンとして研修生を受け入れ、約1年間にわたるOJTによって人材育成することも行っている。

「伝える」ためのインタプリテーション

キープ協会の自然観察会は、「この鳥の名前は〇〇です」というように種名を教えるだけの参加者受け身型ではなく、参加者が五感を生かし、自身の体験でもって、自然の面白さや不思議さや自然との付き合い方を学ぶ場をつくることをめざしている。そしてそれによって、参加者が環境問題を認識し、解決するための入口として、何らかの気づきを得て、行動につながるきっかけを提供することにもつながる。

したがってインタプリターは、参加者の発見や感動に共感しながら、単なる体験で終わらせずにメッセージを参加者の心に届けることが求められる。そのためには、単なる自然のガイド役ではなく、「自然と人」「人と人をつなぐ」役割を担うためのコミュニケーション・スキルを有するインタプリターが必要である。キープ協会はその組織運営を通じて、そうした人材の育成をもめざしている。

「知ることは感じることの半分も重要ではない」
～『センス・オブ・ワンダー』より～



八ヶ岳自然ふれあいセンター入口



森に親しむガイド・ウォーク



インタプリター養成研修の様子